

## ミュージカル劇ができるまで



子どもが主人公の保育とは、どのような保育でしょうか。いうまでもなく、そこにはさまざまな保育の内容や方法がありえます。「劇づくり」もまた、そのひとつの実践の姿です。

いま多くの保育園・幼稚園で、子ども主体性を尊重した「ごっこ遊び」や「劇あそび」がさかんに取り組まれています。しかし、それらを「劇づくり」にまで発展させる取り組みは少ないと思われます。子どもたちの興味・関心にもとづく「ごっこ遊び」や「劇あそび」の段階であれば、子どもたちの主体性と保育者の関与との間にそれほど矛盾は生じないといえます。しかし、「劇づくり」となると、そこには保育者の高度な指導性が必要になります。一歩間違えば、いわゆる「やらせ保育」になってしまいます。

そのようなリスクを承知しながらも、あさひ保育園では「劇づくり」の実践の蓄積を重ねてきました。なぜならば「ごっこ・劇あそび」から「劇づくり」への発展を適切に指導することにより、乳幼児期にこそ豊かに保障されるべき子どもの自由な想像力や創造性、自然や社会そして文化への理解、仲間のなかで自らの思いを主張し、また仲間の気持ちを思いやる力などを育むことができるという確信を同時に築いてきたからです。

子どもが主人公ということは、保育のなかみを、すべて子どもの言うとおりにすることではありません。また、単に子どもの主体性に任せればよいということでもありません。

保育のなかで「演じてあそぶ」というのはすばらしいあそびです。そのなかでもとくに、劇あそびは多種多様なあそびが展開できるし、無限に発達する楽しいあそびです。そこで楽しむ子どもの姿をそのまま発表会で親に見てもらおうと、親も子どもも、見ることを大変楽しめます。

このような劇あそびをしていると、もっと楽しいあそびをしたいという要求が自然にわいてきます。そして、次第に劇のような活動になっていきます。こうして、発表会では五歳になると劇をしたがるようになります。四歳はその過渡期です。五歳児の表現は質的に飛躍的に向上して、五歳児特有の演技力を見せます。まさにそれはいまだかつて見なかった幼児の姿であり、当然幼児の楽しさも、劇あそびとは比較にならないほど、ゆたかで強烈なものです。

五歳児では、力を合わせて劇づくりをやりきって舞台上で成功するという強烈な感動体験を得て、幼児が飛躍的に成長するという実践を積み重ねています。五歳児の劇上演のビデオを公開すると「すごい！これが幼児の劇か！」という評価と、「何もここまでやらせなくても。幼児らしくない」という批判があります。しかし、発表会を前にした保育者からは、このように生き生きと楽しそ





うに劇をやらせたいが、どうしたらよいかわからない、という悩みが出されます。

劇づくりとは、「発表会での劇上演をめざすもの」のひとつにつきます。幼児の劇づくりが否定され、無視された理由は二つではないかと考えられます。

一つは幼児は発達のみにて、劇をする能力をまだもっていないということです。二つめは、それにもかかわらず無理をして発表会で上映させたときの弊害が大きいということです。

従来の保育のなかでの劇づくり観では、劇あそびはあそびであって、見せるためのものではない。あえて幼児の無理をさせるのは、親のための園行事としての必要悪である。と考えた保育者も少なくなかったのです。

しかし、五歳になれば、劇表現能力は確かにゆたかになっていきます。自分たちの劇を親に見せたいという要求は強大です。見せるのが悪いのではなく、見せるためとして間違った指導をするのが悪いのです。



劇あそびから劇づくりに変わっていくことが、実は難しいことだということです。いままで自由に伸び伸びと遊んでいた場面で、劇にしようとした途端に、子どもが固まってしまうとか、言葉が出なくなったりします。それを乗り越えていくのは、子ども達が本当に活動の主人公になったときです。

主人公とは自分の自発的な考えで行動することです。園児の場合も、教えられた通り、機会的に反復するのではなく、内発的な動機によって演じるのです。やらされることと、やることの違いを幼児は体験しながら、「あっそうか」とひらめきで感覚的にとらえるのです。ひらめきでわかった子は、ほかの場面でも自分の力で応答します。やらせの保育を見ていたら、このひらめきがないまま、あそび心に点火しないまま、引きずっていかうとするところに無理があったのだと思います。



劇づくりにおける子どもを主人公にする方法として、具体的に取り組んでいることを簡単にまとめてみました。

題材選びですが、起承転結のはっきりした作品、子どもや親に感動をよびそうなもの、主人公の行動が基本的にずっと一本通って前に進められていることがよくわかり、感じられ、ハッピーエンドなものなどがいいと思っています。しかし最終的決定は子どもがやらなければなりません。

題材が決まったら、ストーリーを深めていながら、まずはごっこあそびを満喫します。次に、そのときそのときの気持ちや表情を考えながら、場面ごとに遊んでいきます。いろ

んな役になって遊んでみます。遊んでいく中で適役がでてきます。このとき子どもの些細な表現、声なき声を聞き取っていきます。遊んでいるうちは場面が広がるがありますが、深まることはありません。あそびを楽しんだら、ころあいを見て、劇づくりに切り替えるようにしています。



劇作りに向けて、登場人物の心情、要求を明らかにし、行動の目標を定めてそのつど、即興で演じます。このときにその気になって言葉を発していきます。いわゆる次第にせりふに固定していきます。

劇づくりで大切なせりふについては、保育者が見本を見せて、棒読みせりふから子どもを脱出させてあげます。何を言うかということよりも、どう言うかということが大切なのです。

セリフの練習では、だめ、やり直しという訓練はしません。「そんな言い方もあるんだ。なるほど」と子どもの表現を評価してあげます。「役にぴったりだね」などと言って楽しんでいると、せりふが変わって新鮮な舞台にいっぺんします。

動きについてもセリフと同じです。よさそうな表現をみつけてみんなの前でやってもらったり、難しい表現の場合は、保育者が演じてみせて子どもに考えてもらいます。大切なことは、くれぐれも一歩先に出ないように心がけています。



劇づくりは、発達段階に応じて想像あそびを楽しんでいることが大切です。二歳、三歳ころから劇あそびの楽しさをしっかり体験した幼児が、五歳になったときはじめて劇ができるのです。

